憑依論

ホー・ルイアン

資本主義下に置かれた近代の東アジアおよび東南アジアの歴史には、学生組織が現れては消え、消えてはまた現れる。映像作品《Student Bodies》のなかで、集団であると同時に単体でもあるこれらの組織は、歴史のさまざまな転換期において、発展途上にあったり、その矛盾から生じる急進主義の渦中で国の政治体制を構成する国民を象徴している。映像の冒頭に登場するのは、日本人で初めて西洋で学んだ幕末期の薩摩や長州の学生たちだが、チャルマーズ・ジョンソンが戦後の日本について述べたように、彼ら「資本主義の学生の星(スター)たち」が、次の瞬間、いかにして路上で落命する学生抗議者になったのかを描き出している。だが、映像のどこを見ても学生の肉体は登場しない。厳密に言えば、彼らの肉体はどこにもない。彼らの存在の痕跡を残した建築や記念碑、資料などの場面が映し出されるなか、字幕なしには理解不能の幽霊のような発話で満たされた、恐ろしげなサウンドトラックが流れる。この恐怖に満ちた雰囲気は、彼らの存在が復活したものではない。彼らの存在が立ち退いたことで、それが前景化したものだ。これが憑依論である。

ホー・ルイアン《Student Bodies》2019年、HD video、26’30”

関連ワード

近代の超克